

# デカルトと記憶術の伝統

## —ラムス主義を経由して—

久保田 静 香

### はじめに：ラムスとデカルトの思想的類縁関係の再考に向けて

16世紀フランスの人文主義者ペトルス・ラムス（Petrus Ramus, 1515-1572）と17世紀フランスの哲学者ルネ・デカルト（René Descartes, 1596-1650）の関係については、後者が前者から何らかの思想的影響を受けているものと長らくみなされてきた。古くは19世紀半ばのシャルル・ワディントンによる伝記『ラムス—人生、著作、主張—』<sup>1)</sup>や同世紀半ば過ぎのエミール・セセ『デカルトの先駆者とその弟子たち』<sup>2)</sup>から、20世紀半ばのウォルター・J. オングによるラムス研究の金字塔『ラムス、方法、対話の衰退』<sup>3)</sup>を経て、同世紀後半のネリー・ブリュイエール<sup>4)</sup>やアンドレ・ロビネ<sup>5)</sup>による著書にいたるまで、両者の影響関係は半ば前提とされていたといえる。ラムスの著作物を探ることで、デカルト思想の出処を捉えられるのではないかと——そうした期待を抱かざるをえないほど、一見したところ、この二人の思想を特徴づけるキーワードには共通するものが多い。その最たるものが「方法（*methodus*, *méthode*）」である<sup>6)</sup>。

しかしながら、21世紀初頭にデカルト研究者のフレデリック・ド・ビュゾンが論文「数学とディアレクティック—デカルトはラムス主義者か？—」<sup>7)</sup>を発表してから潮目が変わることとなる。この論文でビュゾンは、デカルト自身によるラムスへの言及は書簡を含めたテキスト全体をつうじてたったの2箇所しかなく、しかもそこにはラムスの思想そのものに立ち入った記述はまったく見られないため、デカルトがラムスをどう評価していたかについては実証困難である点を改めて強調した。そのうえでビュゾンは、ラムスとデカルトにおける「マテシス（*mathesis*）」概念を、それぞれのテキストに立ち入って比較対照したのち、たとえ同じ言葉を用いていても、その内実はまったく異なる性格をもつものであると断じ、「デカルトはラムス主義者ではない」との見解を前面に打ち出したのである。

このビュゾンの論を受け、筆者自身も2014年、レトリックという観点を導入してラムスとデカルトの思想の比較考察をおこなった。これにより、ラムスのディアレクティック改革がレトリック改革と一体のものであったのに対し、デカルト哲学においてレトリックは根本から排除の対象となっていたことなどを見てとり、両者の思想が大きく性質を異にする土台の上に建てられたものであることを確認した<sup>8)</sup>。2018年の佐藤真人氏による研究では、ビュゾン論文においては未調査であった数学関連のテキストにも踏み込んだうえで、「学問の連鎖や普遍数学などの概念、中項を介して認識を結合する方法等に共通点があり、影響の可能性が否定できないとはいえ、デカルトをラムス主義者とみなすことはできまい」と結論づけられている<sup>9)</sup>。

こうして、ラムスとデカルトの間の思想的類縁関係を頭から信じ込むことはもはやできず、かといって実証的な研究を推進するには十分な材料に欠けるといった現状にあって、筆者は、ラムスとデカルトの関係についてはむしろ、デカルト主義者としての側面ももちあわせていたアントワヌ・アルノー (Antoine Arnauld, 1612-1694)、クロード・ランスロ (Claude Lancelot, ca. 1615-1695)、ピエール・ニコル (Pierre Nicole, 1625-1695) といったポール＝ロワイヤルの隠士たちによる著作<sup>10)</sup>をつうじて、間接的に見ていくほかないとの見通しを立てていた。

そうしたなか、近年進展の著しい記憶術分野の一連の論考<sup>11)</sup>をつうじ、ラムスとデカルトを直接つなぐものについて再精査する必要を認めたのである。加えて、もとより「記憶」の問題自体が、デカルトの思索の動機にかかわる特別な位置を占めるものであることを、下記に引く所雄章氏の示唆に富む指摘から確信するにいたったことも大きい。

実をいうと、〈記憶〉——記憶の弱さということ——への関心は、デカルトの生涯を通じて(いわば隠然としてではあるが)、彼の思索を一貫して動かし続けた重要なテーマ、というよりは、むしろ思索の動機の一つであった、と言えるように思われる<sup>12)</sup>。

よって以下の考察では、とりわけ16世紀から17世紀初頭にヨーロッパで広がりを見た記憶術の内実を把握したのち、記憶術への言及が比較的多くみられるデカルトの初期テキスト——イサーク・ベークマン (Isaac Beeckman, 1588-1637) との往復書簡に代表される——の細部に分け入ることで、かろうじてはであれ、そこにおのずと浮かびあがるラムス主義の、あるいは少なくともラムス主義的な知的遺産の痕跡をとらえてみたい。

## I. 記憶術とルルスの術：16世紀から17世紀前半までのヨーロッパにおける動向

知られるようにデカルトは、その著作や書簡中で「ルルスの術」について何度か言及している。なかでも『方法序説』「第2部」にみられる「論理学は(…)ルルスの術のように、知らないことを何の判断も加えず語るのに役立つだけだ」<sup>13)</sup>という一節は、いかにもデカルトが槍玉にあげそのような旧来の知的伝統の具体例として、ひときわ目を引くもののひとつである。これ以外にも、ベークマン宛ての最初期の書簡において、同じルルスの術をめぐる興味深いやりとりが交わされているが、それらの検討に入る前に、そもそもデカルトのいう「ルルスの術」なるものがいかなるものであったのかを把握しておく必要がある。というのも、中世にライムンドゥス・ルルス (Raimundus Lullus, ca. 1232-1315) 自身が考案した術は、数世紀を経たのち、少なからずの変容を被っていたからである。このあたりの歴史的事情について、パオロ・ロッシやフランセス・イエイツといった記憶術にかんする代表的な研究を参照しつつ<sup>14)</sup>、まずはその概要をつかむことから始めよう。

ライムンドゥス・ルルスが活躍したのは13世紀から14世紀にかけてのことであり、その間ルルス自身は、宣教活動とあわせて、神学、哲学、自然学、教育学、そして散文や韻文による文学的テキストにいたるまで多種多様な著作をものした。こうした一連の著作活動をつうじてルルスは、宇宙の体系そのものと照応するような学問と概念の全体系の把握を渴望し、「円、樹木、一覧表」

といった抽象的図形を積極的に利用して、この世の实在の基礎原理と知的世界の百科全書的分類の完成に意を注いだのである。これらの多数のルルス著作のうち、デカルト自身が言及するのはもっぱらルルスの『小さき術 (*Ars brevis*)』という書物である。この『小さき術』は、1308年ごろに著された『究極の一般術 (*Ars generalis ultima*)』——『大いなる術 (*Ars magna*)』との別名をもって知られる——と同時に書かれた簡易版である<sup>15)</sup>。「ルルスの円盤」で知られるように(図1)、ルルスの術とは原則的にこのように、アルファベットの文字で概念全体を表示することで実在物の原理をとらえることを旨としていたため、どちらかという代数的ないしは抽象科学的な性格をもつものであった。



図1 R. ルルス『小さき術』より(出典: Francis A. Yates, *The Art of Memory*, London: Routledge & Kegan Paul, 1966, p. 182)

ところが15-16世紀のルネサンス時代に入ると、このルルスの術に、もともと出自の異なる「古典的記憶術」や「ヘルメス主義のカバラ思想」が入り込むこととなる。まずはピーコ・デッラ・ミランドラ (Giovanni Francesco Pico della Mirandola, 1463-1494) がカバラ主義の「結合術」と「ルルスの術」を同一視したことにより、次第にルルスの思想とはカバラ主義の教えなのだという考えが広く浸透していくこととなった。ちょうどこの時代の1531年にコルネリウス・アグリッパ (Heinrich Cornelius Agrippa von Nettesheim, 1486-1535) による『ルルスの小さき術の註解』<sup>16)</sup>が出ているのだが、次章で詳しく検討するように、デカルトがルルスの思想に触れたのは主に、ルネサンスの代表的「魔術師」として知られるこのアグリッパによる『注解』を介してのことであったという事実は特筆に値する。そしてこうした思潮のただなかで独自の記憶術を練りあげた

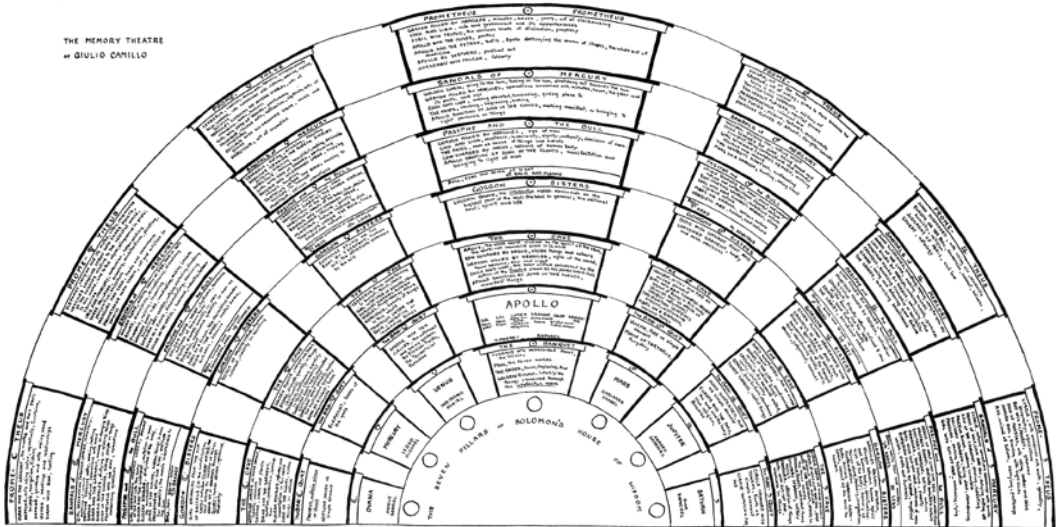


図2 G. カミッロ『記憶の劇場』(出典: Yates, *op. cit.* fig. 10)

のが、『劇場のアイデア (*L'idea del theatro*, 1550)』で知られるあのジュリオ・カミッロ (Giulio Camillo, ca. 1480-1544) であり、またキリスト教異端思想の嫌で死刑に処せられたイタリアの哲学者ジョルダノ・ブルーノ (Giordano Bruno, 1548-1600) だったのである。

これらの人びとが目指していたのは、ルネサンス期にオカルト哲学化された古典的記憶術にルスの思想を合体させることにより、「世界のアルファベット」を解読することで、実在界の構造を再現する装置を作りあげることであった。当時のルス思想は、古典古代伝来の記憶術的な側面と、カバラ主義的な側面が混然一体となり、その全体が、西欧ルネサンス期特有の

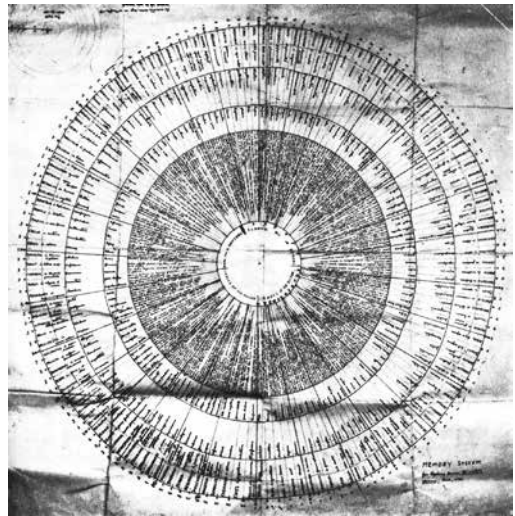


図3 G. ブルーノ『アイデアの影』より  
(出典: Yates, *op. cit.* fig. 11)

自然魔術の様相を呈するものとなっていたといえる。確かにその代表格たるカミッロの〈記憶の劇場〉は(図2)、エラスムス (Desiderius Erasmus Roterodamus, 1466-1536) の揶揄の対象となり、またオカルト主義的体系を徹底させたブルーノの急進的な記憶術は(図3)、ケンブリッジ大学の熱烈なラムス主義者から激しい攻撃を受けるなど、各所から反発もみられた。とはいえこれらのルネサンスの新しい記憶術には同時に、汎智論的かつ普遍学的性格がいっそう強く作用していたこともあり、17世紀に入ってから依然として記憶術やルス思想の信奉者は存在感を示し続けていた。下記が、16世紀末から17世紀前半に刊行された代表的な記憶術関連の書である<sup>17)</sup>。

1593年 シェンケル『記憶の書』<sup>18)</sup>

1600年 アグリッパ『全集』(第2巻『学問と学芸の不確かさと無益さ』)のなかに『ルス小さき術の註解』所収<sup>19)</sup>

1617年 ヨハンネス・ペップ『解明されたシェンケリウス、あるいは今日にいたるまで秘めおかれた人工記憶』<sup>20)</sup>

1620年 カンパネルラ『事物の知覚と魔術について』<sup>21)</sup>「場所記憶術」の記述あり

1654年 ジャン・ブロー『人工記憶論』<sup>22)</sup>

なおデカルトは、この略年表にあるシェンケル (Lambert Thomas Schenkel, 1547-1625) とアグリッパの著作に加え、テレシオ (Bernardino Telesio, 1509-1588)、カンパネルラ (Tommaso Campanella, 1568-1639)、ブルーノ、ヴァニーニ (Giulio Cesare Vanini, 1585-1619) といった人びとの書物も読んでいた事実を1630年のベークマン宛て書簡で伝えている<sup>23)</sup>。『方法序説』「第1部」で、イエズス会学校ラ・フレーシュ学院での学びのときを回想しながら「最も秘伝的で稀有とされている学問を扱った本まで、手に入ったものはすべて読破した」<sup>24)</sup>と得意気に語っているところをみても、この理性の哲学者がその独自の思想の形成過程において、こうしたオカルト哲学的



な著作からも知的養分を得ていたことが知られるのである。

以上に概観したとおり、17世紀初頭に若きデカルトが強い関心を示したルスの術は、複数の世紀をまたぐ時の流れとともに変質を余儀なくされたものであった。このことを受けて以下の考察においては、おおむね時系列に沿って、関連するデカルトの初期テキストを読み解いていくこととする。

## Ⅱ. ルスの術とデカルト

現代にまで伝えられているテキスト中、デカルトがルスの術に言及したものとして最初なのは、1619年3月26日にオランダのブレダで書かれたイサーク・バークマン宛の書簡である。当時デカルトは22歳、あと数日で23歳になろうとする若い身空であった。イエズス会ラ・フレーシュ学院<sup>25)</sup>、そしてポワティエ大学<sup>26)</sup>といった、いわゆる「学校」での勉学を終えたあと、「文字による学問を完全に放棄し (je quittai entièrement l'étude des lettres)」、「世間という書物のなかで学ぶことに数年を費やして (j'eus employé quelques années à étudier ainsi dans le livre du monde)」いたころのことである<sup>27)</sup>。具体的には、1618年にオランダのナッサウ公マウリッツ (Maurits van Nassau, 1567-1625) の軍隊に志願将校として加わって1年たらずにしてバークマンと初めて出会った時期である。この8歳上のオランダの自然学者との運命的な出会いによってデカルトの学問熱は再び高まっていたのだった。

さて、当該の書簡には下記のような一節がみられる。

(…)私の企てを隠すことなく打ち明けるなら、私が開示したいと思っているのはルスの『小さき術 (Ars brevis)』などではなく、根本から新しい学問 (scientiam penitus novam) です。それは、連続・不連続を問わずいかなる種類の量においても、それぞれの本性にしたがって提出されうるすべての問題を一般的に解くことができるような学問です。(中略) 確かに、この仕事は果てしない仕事であり、一人の手に負えるものでもありません。信じられないほど野心的な企てです。けれども、私は学問のこの暗い混沌の向こうに名状しがたい光を目にし、この光の助力をもってすれば、どんなに鬱蒼たる暗闇であろうと追い払われうるように思われるのです<sup>28)</sup>。

「中略」した部分でデカルトは、算術、幾何学、想像上の線などについてとりあげて、自分はいま数学上のいかなる難問でも解き得るような「新しい学問」を構想しているのだとバークマンに伝えている。つまり「根本から新しい」といわれているその学問は数学研究から想を得たものであったことが、この時点ですでに窺える。デカルトの新しい学問への情熱はいわば、「ルスの術」を向こうに回し、数学を基盤とするまったく別の新たな普遍的な学を打ち建てようとの野心とともに湧き立っていたのである。

だからといって、一方の「ルスの術」がデカルトの念頭をただちに去ってしまったかという、決してそうではなかった。上の手紙を書いてちょうど1か月後のこと、みずから身を寄せていたドルドレヒトの宿である学識豊かな人物と遭遇し、そこでともにルスの『小さき術』に

ついて語り合う機会をもったというのである。その人物は、ルルスの術をもってすれば20時間でも滔々と話し続けられると自慢するが、デカルトの目には「少し饒舌な老人」としか映らなかったようだ。「書物 (*libris*)」から汲まれた学識といえども、それは頭ではなく「唇の先 (*labris*)」に宿ったものにすぎなかろうと、ラテン語の言葉遊びも混ぜながら、そのときの出来事をバークマンに宛てておいに皮肉めかして書き留めている。この1619年4月29日付の手紙のなかで、特に注目したいのは下記のくだりである。

しかし、私はさらに注意深く、次のように尋ねたのです。その「術」は、弁証術のトポス——そこから論拠が選り出されるのですが——の何らかの配列から成っているのではないか (*vttrum ars illa non consisteret in quodam ordine locorum dialecticorum vnde rationes desumuntur*)、と。すると、彼 [= ドルドレヒトの饒舌な老人] は確かに同意しましたが、さらにこう付け加えました。ルルスもアグリッパも自らの書物のなかで、この術の謎を解き明かすのに必要な、曰く鍵 (*claves*) のようなものを教えなかったのだ、と。むろん、彼がそう言ったのは、真実にふさわしく語るためというよりもむしろ、無知な者の賞賛を得たいがためではないかと私は疑っています<sup>29)</sup>。

このときデカルトの口から発せられた「弁証術のトポスの配列」とは、議論や演説を構成するために必要とされる論拠のひとつひとつが、紙の上になんらかのかたちで並べられている状態のことを指しているものと思われる。上掲の一節にみられる老人への問いかけの裏には、「ルルスの術」などという人智の働きを巧みに操ることを謳った秘術めいたものであろうとも、結局は旧来の弁証術のトポスと何ら変わるところはないのではないかと、の若きデカルトの鋭敏な勘繰りが透けて見える。それに対して当の饒舌なる老人は、この初対面の若者の炯眼に射すくめられたかのように、問いかけそのものにはその場で同意するも、それでも術の秘密を明かしてくれる「鍵」のことは書物のなかでは伏せられている、と口を濁す。その煮え切らない応答を前に、この未来の哲学者は「ルルスの術」に備わるとされる真の有効性にいっそう疑念を深めながらも、というよりもむしろ疑念が深まったからこそであろうが、当の術の謎を解く「鍵」そのものへの関心がますます高まったかのようにして、バークマンに次のような頼みごとをするのである。

とはいえ、その本をもってれば、調べてみたいところです。ですが、あなたはお持ちなのですから、もしお暇があれば、調べてください、お願いします。そして、その術のなかに何か創意工夫に富んだものが見いだせるかどうか (& *scribe utrum aliquid ingeniosum in arte illa reperies*)、手紙に書いていただきたいのです。私はあなたの知力にかくも信頼を寄せていますので、あの老人が鍵 (*claves*) と呼ぶもの、それがいかなるものであるのか、もしもそれがあればですが、残りのところを理解するのに必要でありながら省かれている (*omissa*) その点を、あなたは簡単に見抜いてくれると確信しています<sup>30)</sup>。

このデカルトからの懇願の手紙を受けて、バークマンは5月6日付の書簡ですぐに返信している。ただ返信するに際してバークマンは、アグリッパの『ルルスの小さき術への註解』の原著を

デカルトのためにわざわざ読み直すという労はとらず、数年前に目をとおした際の記憶に頼って要点のみを伝えたと記してしている<sup>31)</sup>。けれども実のところは、バークマン自身もこの問題を放っておけなかったらしく、みずからアグリッパの『註解』を改めて繙き、再読後の所感を日記のなかにこう書きつけている。

ルルスの『小さき術』は（ただし、アグリッパの『註解』を読むのに1、2時間かそこらで頭に入った限りのことだが）、あらゆる事柄の骨子を簡潔に（短時間で）教えるのに役立つだろう。すなわちその術は、あらゆるものを分割して、分割の対象となる何らかの部分がまったく残らないようにしてしまうのである。〔中略〕他方で、ラムスの論理学（*Logicae Rameae*）はといえば、ルルスの術によって無用のものとされてしまうかのように見えるかもしれないが、この論理学の目的は〔ルルスの術とは〕異なったもののなのだ。というのも、〔ラムスの〕論理学は、〔ルルスの〕小さき術によって結びつけられたあらゆるものが相互に関連し合っていることを、また、あるものが他のものと、発想部門の10のトポスに従って（*secundum decem locos inventionis*）、どのように関連し合っているかを教えてくれる。かくしてルルスの術は、諸学のさまざまな範疇ないしは体系の集積のようなものとなろう。〔それに対して〕実際に〔ラムスの〕論理学は、個々の学問に傾注しつつ、事柄の〔あいだにある〕密接な関係を教えてくれる。それゆえ、個々の学問はルルスの術に成り代わるが、ルルスの術は〔ラムスの〕論理学に代わり得るものではまったくないのである（… ; *logica vero in singulis versata docet rerum affinitatem. Particulares scientiae igitur sunt vice artis lullianae, ars vero Lullij non potest plane esse vice logicae.*）<sup>32)</sup>。

この時代に伝わったルルスの術について再考察するにあたり、バークマンがただちに「ラムスの論理学」を連想したことを見逃すわけにはいかない。しかもその「論理学」を、「ルルスの術」との明確な対比の対象としてあえてもちだし、両者の特徴を複数の観点から突き合わせながら、最終的に、ラムスの論理学がルルスの術の上をゆくものであるとの見方を隠さない。加えてラムスの論理学については、「発想部門の10のトポスにしたがって」との記述がひととき目を引く。これについては、ラムス著『弁証術』の「発想部門」に含まれるトポスが実際にほぼ10種類あることを鑑みると<sup>33)</sup>、バークマンがラムスの弁証術の内実にもよく通じていたことがわかる。

バークマンの機械論的自然哲学にラムス主義の思想が実際に大きな影響を与えていたことは、クラス・ファン・ベルケルの研究に明らかである<sup>34)</sup>。ベルケルによれば「バークマンの機械論的哲学は、ある程度までラムス主義の原則を適用したもの」<sup>35)</sup>であり、また「バークマンが概念を視覚的に表示することを好んだこと自体が、ある部分、彼がラムス主義の教育を受けたことに由来する」<sup>36)</sup>のだという。その実バークマンはオランダでラムス主義者のスネル父子と学問的な師弟関係を結んでいた。特に1609年から1610年ごろルドルフ・スネル（*Rudolph Snell*, 1546-1613）によって数学文献の読書計画を授けられており、そこにはラムスの数学関連著作が複数含まれていた<sup>37)</sup>。またルドルフの息子のヴィルブルド・スネル（*Willebrord Snell*, 1580-1626）に、バークマンはレイデンで師事している。このようにいわばラムス主義の思想の薫陶を受けた人物とともに数学や自然学の研究に打ち込んでいた20代初めのデカルトが、折に触れてラムスのこと

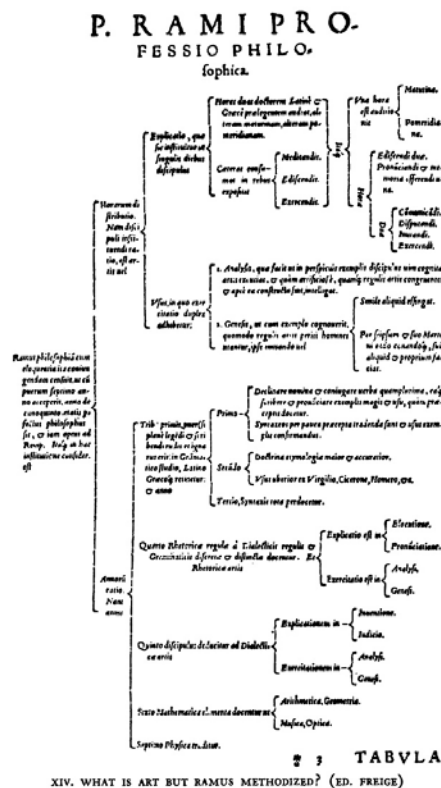
を聞き及んだ可能性は大いにあろう。また、先に引いた1619年5月14日の日記の文面からも知られるように、バークマンは数学関連著作だけでなく、ラムスの論理学著作も所有し、それらに目を通していたことが明らかである以上、デカルトもそうした著作に広く触れていたとしても不思議はない。なにしろデカルトもまた、「ルルスの術」のなかに「弁証術のなんらかの配列」があるのではないかと踏んでかかるようなルネサンス人文主義的な知的バックグラウンドにおかれていたのだから。

ところでバークマンはこの日記のなかで、「ラムスの論理学」という表現を用いているが、ラムスはその多産な著作活動において、「論理学」、すなわち *Logica* ないしは *Logique* と題する書物はひとつも書いていない。ここでいわれる「論理学」とはいわば通称のようなものである。要するにそれは、ラムスの「弁証術」、すなわち *Dialectica* ないしは *Dialectique* の言い換えに他ならない。これはラムスが自身の「弁証術」のことを「論理学」とみなしていたことに由来する。たとえばラムスのフランス語版『弁証術 (*Dialectique*)』の本論冒頭において、弁証術は論理学と同義語であるとされ、また両者は「単一にして同一の学 (une et mesme doctrine)」と規定されている<sup>38)</sup>。なかでも「弁証術すなわち論理学 (*Dialectique ou Logique*)」という言い回しは、ラムス自身が読者に何度も確認を求めるかのように、その著作中で頻繁に用いるものである。

なおこの「ラムスの弁証術」なるものは、古代ローマ時代に5つの部門から成るものとして完成された「弁証術」をベースに換骨奪胎して再構築されたものである<sup>39)</sup>。ラムスのラテン語版

『弁証術』は、1555年以前には、「発想 (*inventio*)」、「配置 (*dispositio*)」、「記憶 (*memoria*)」の3部門から成っていたのだが、1555年刊行のフランス語版『弁証術』以降は、「発想 (*invention*)」と「配置 (*disposition*)」のみとなり<sup>40)</sup>、「記憶」部門はそこから除外されることとなった。それではその除外された「記憶」部門は「ラムスの修辞学」に入れられたのかというと、そうではない。同じ1555年に出されたフランス語版『修辞学』には、「措辞 (*elocutio*)」と「口演 (*actio*)」しかみられない<sup>41)</sup>。文字通り、「記憶」部門はラムスの弁証術／修辞学の体系から抹消されてしまったのである。

そしてこの「記憶」部門の抹消にこそ、ラムスの弁証術の真の意義が隠されているといわねばならない。これについてはパオロ・ロッシも明言しているように<sup>42)</sup>、ラムスによる「新しい弁証術 (= 論理学)」そのものが、あらゆる主題をよりよく記憶する術の代わりを果たすものとなった、すなわち、彼の弁証術 (= 論理学) 全体が一つの記憶術の役割を果たすことになるため、もともと古典レトリックに属して



XIV. WHAT IS ART BUT RAMUS METHODIZED? (ED. FREIGE)

図4 「ラムスの樹 (ダイアグラム)」 1576年  
(出典: W. J. ONG, *Ramus* 2004 [1958], p. 261)



いた「記憶」部門を個別に扱う必要がなくなった、ということなのである。より端的には、ラムスの改革された弁証術それ自体が、新たな記憶術の創成を目論むものであったということだ。もとよりラムスの「方法 (méthode)」が「手際のよさ (adresse)」や「行程の短縮 (abregement de chemin)」といった比喩で捉えられるようなものであって<sup>43)</sup>、その「方法」の具現化が、あの徹底的な二分法の適用から成る「ダイヤグラム (樹形図)」であることを思えば、その図式化の過程と結果の全体がある種の記憶術なのだと捉え方にもおのずと頷ける。ラムスのダイヤグラムが当時あれほどの脚光を浴び、一世を風靡したのも、それが一目で全容を見渡せる一覽性を備えた「新しい記憶術」であればこそのものであったといえるだろう<sup>44)</sup>。(図4 ラムスの樹)

以上から、次の3点を確認するに至った。第一に、ベークマンと出会って間もないころのデカルトが、「根本から新しい学問」の構想とともに特別な関心を寄せていた「ルルスの術」には、古典的記憶術とルネサンスの魔術思想という、出所を異にする複数のファクターが後から加わっていたという点。第二に、その「ルルスの術」がラムス主義者たるベークマンの目からみて「ラムスの論理学=弁証術」と対比的な関係におかれるものであったという点。第三に、その「ラムスの論理学=弁証術」自体にひとつの「記憶術」としての性格が備わっていたという点である。こうした新たな「術」の登場は、人間の認識と記憶の作用をつぶさに観察することで、ルネサンス期に爆発的に増大した情報をいかに整理し、そしてそれらの情報をいかに運用するかといった、この時代に特有の問題意識に支えられて可能となったものでもある。これらの点を踏まえ、以下、本稿の主要な関心事である、ラムスとデカルトをつなぐ有力な一因子としての「シェンケルの記憶術」をめぐる考察にとりかかることとしたい。

### Ⅲ. シェンケルの記憶術とデカルト

1547年にネーデルラントで医者の子として生まれ、中欧を中心にヨーロッパ各地で記憶術教師として活躍したランベルト・トマス・シェンケルなる人物がいる。このシェンケルがラムス主義者であるか否か、これはいまだに議論の余地のある問いである。W. J. オングは1958年刊行の『ラムスとタロンの著作目録』巻末で、20ページ以上にわたって人名リストのコーナーを設けており<sup>45)</sup>、ここでは16世紀前半から18世紀前半にかけて活躍した思想家や学識者らが、「ラムス主義者=Ramist、略号はR」、「反ラムス主義者=Anti-Ramist、略号はA」、「準ラムス主義者ないしは折衷主義者=Semi-Ramist or syncretist、略号はS」、ないしは「準ラムス主義者の傾向あり、略号は(S)」のいずれかに分類されている。つまりこのリストを参照すれば、ラムス主義に対してだれがどの立場にあるのか——より正確には、だれがどの立場にあるとオングが見なしているのか——が一目瞭然といった体裁となっているのである。

この人名リストにおいて、ランベルト・トマス・シェンケルには「(S)」というラベルが付されている<sup>46)</sup>。よってシェンケルとラムスの関係は、オングの目から見ても甚だ曖昧かつ定めがたく、準ラムス主義者とも断定しがたいといった類いのものであったことがわかる。ただその立場の見定めがたさは、ひとえに、シェンケルがその著作中でラムスの名を一度もあげていない<sup>47)</sup>というその一点に尽きるものと筆者には思われる。桑木野氏が述べているように、シェンケルが「ラムスの思想あるいは少なくともラムスに代表される同時代の人文主義的教育思想の一端を知悉し

ていた」ことは確かであろう<sup>48)</sup>。半世紀以上前のオングの時代と比べて、記憶術についてもシェンケルについても目覚ましい研究上の進展をみた現在において、シェンケルを「ラムス主義者」と断ずることはできずとも、少なくとも「準ラムス主義者」とみなすことに何ら問題はなかろう。この準ラムス主義者のシェンケルが書いた『記憶の書』<sup>49)</sup>をデカルトは確かに読んだことがわかっている。若きデカルトの手になる初期の小編『パルナッスス』に属するものと考えられている断章中に、シェンケルの名とその書名がはっきりと記されているのである。

ランベルト・シェンケルの〔いかにも〕実用に供する戯言 (Perlegens LAMBERTI SCHENKELIJ lucrosas nugas) (『記憶術について』という書物) を通読して、想像力によって自分が明るみに出したものすべてを私が把握することは容易であると考えた。それはものごとを原因に帰すことによって成し得ることだ。また、すべては結局のところ、たった一つの原因に帰されるのだから、あらゆる学問にとって何らの記憶 (力) も必要ではないことは明らかである (patet nulla opus esse memoria ad scientias omnes)。実際、原因を理解する者は、完全に消滅した像でも、その原因を刻印することによって脳内にもう一度やすやすと形作る。これこそが真の記憶術であり、あのいかさま師の術とは対極をなすものなのだ (Quae vera est ars memoriae, illius nebulonis arti plane contraria)。彼の術がまったく効力を欠いているというわけではないのだが、全体がよりよく用いられるべき紙を必要とするし (quod chartam melioribus occupandam totam requirat)、また、〔彼の術は〕正しくない順序から成っているのである。〔正しい〕順序とは、像が相互に依存し合うように形成されるということのなかにこそある。それがわざとかどうかは私にはわからないが、このこと〔相互に依存しあう正しい順序〕については、彼は書き落としているのだ。だがそれこそが、あらゆる謎を解く鍵なのである<sup>50)</sup>。

一読して、デカルトがシェンケルの記憶術を厳しく難じている様子が見てとれる。その書を形容するのにまず「実用に供する戯言 (*lucrosas nugas*)」なる極めて即物的な表現が選ばれていることが目につく。これは要するに、金にはなるだろうが所詮は実質を伴わないたわごとではないか、との当て付けの意を目一杯にこめたものであろう。続く「あらゆる学問にとって何らの記憶力も必要ではないことは明らか」との否定的断言のなかには、記憶力の負担を極力減らすことをもってして新たな学問を樹立しようと夢見る若きデカルトのただならぬ意気込みが顕わにされている。実のところ、デカルトの求める「真の記憶術」とは、記憶の力にいっさい頼らずにすむものでなくてはならなかった。そのことは、シェンケルをあからさまに「いかさま師」呼ばわりさえしながら、自分が構想する「真の記憶術」との違いを鮮明にしようとする姿勢からあきらかである。

また上の一節中、特に注目に値するのが「全体がよりよく用いられる紙が必要となる」という一見何気なく綴られたかのような箇所である。「紙 (*charta*)」という具体的な物質がいささか唐突に登場するために文脈を捉えにくい、ここで言われているのは、シェンケルの術には「紙」という媒体の有効性を最大限に利用して、より望ましいかたちで書きつけられた何らかの情報の配列がある、ということであろう。つまりデカルトは、シェンケルの記憶術の書のなかに、ある

秩序にもとづいて整えられた知の姿形を見てとった。だからこそ、その書物をより正確に理解するためにわざわざ「紙」を用意し、ペンをとって、文章を辿りながら内容を整理した。しかし、そうやってせっかく紙の上にみずから整理して書きつけたあれこれの事柄も、よく見ればその順序自体が間違っているではないか。この一文にはしたがって、シェンケルの『記憶の書』を少なからずの期待とともに読み進めたデカルトが抱いた不満の声もまた響いているのである。以上から明らかとなるのは、たとえ間違った順序におかれていると最終的に判断されるようなものであったとしても、そのシェンケルの記憶術のなかに、デカルトが何らかの「秩序化された知の配列」を看取したということである。そしてまた、このとき同時に「その術がまったく無効というわけではない」として、シェンケルの記憶術の価値をきわめて限定的にはあれ認めていることから、20代初めの時点ですでにデカルトが、知や情報を秩序づけて配列するという手続きそのものに特別な関心を寄せていたことがわかるのである。

そしてこのテキストの後半では、シェンケルの記憶術とは違う「別のやり方」をデカルト自身が考案したと述べられている。

私のほうは、別のやり方を考案した (Ipse excogitavi alium modum)。〔互いに〕関連がないわけではない事物の像から出発して、あらゆるものに共通する新しい像が得られる場合、あるいは少なくとも、あらゆるものから出発して、まとめてたった一つの像を作る場合、その像は、最も近くにあるものと結びつけられるだけでなく、他のものとも結びつけられる (nec solum habeatur respectus ad proximam, sed etiam ad alias)<sup>51)</sup>。

ここに記されたデカルト流の「別のやり方」は、1628年ごろの執筆とされる『精神指導の規則』中の「演繹」の作用に通じる面がある。知られるとおり『精神指導の規則』において、「知識への最も確実な途」には「直観 (intuitio)」と「演繹 (deductio)」の「二つの途」があるとされている<sup>52)</sup>。本稿ではとりわけ二つ目の「演繹」が「記憶の軽減作用」との関連において詳述されていることに注目したい。

…実にこの演繹なるものは、時として非常に長い推論の連鎖によって行われるから、かの真理に到着したとき、そこまでわれわれを導いてきた道程全体を想起することが容易ではない。それで一種の連続的な思惟の運動によって記憶の弱さに力添えをしなければならないのである (ideoque memoriae infirmitati continuo quodam cogitationis motu succurrendum esse dicimus)。そこでたとえば、私がいろいろな操作によってまずAB2量の間にいかなる関係があるかを知り、次にBとC、さらにCとD、そして最後にDとEとの間の関係を知ったとしても、だからと言って、AとEとの間にいかなる関係があるかを看取するとはいえず、また既知のものにもとづいて正確に理解するともいえない。それにはなおそれらすべてを記憶しておかねばならない (omnium recorder) のである。これゆえ私は、ひとつひとつを直観すると同時に他へと移りゆく一種の連続的な想像の運動によって、何度かその全体を見渡す (percurram) ことになるだろう。そしてついには初めから終わりへと極めて速やかに渡ってしまうことができるようになり、もって記憶の役割をほとんど残さずして (fere nullas

memoriae partes relinquendo) 事物全体を同時に直観すると思われるようになるのである。まさしくこのようにして人は、記憶に助力を与えつつ (memoriae subvenitur)、精神の遅鈍をも矯正し、精神の把握力がある意味で増大するのである<sup>53)</sup>。

以上の記述から、「準ラムス主義者」の記憶術師シェンケルの著作の読後感が綴られたデカルトの最初期の断片的テキストのなかに、初期の代表的著作である『精神指導の規則』の思想的な萌芽が認められるといえる。とりわけデカルトの新しい学問・哲学の構想の発端に、「記憶の助け」となるような新たな方法を見出すことへの強い思い入れがあったことが知られる以上、新たな弁証術の考案自体が新たな記憶術の創出につながるという、前世紀にすでにラムスによって教育の現場で実践に移されていた画期的なアイデアに、もしも若きデカルトが触れていたとするなら、それに何らの触発も受けなかったとは考えにくく、それどころか大いに魅了されたであろうことは想像に難くない。

\* \* \*

ラムスとデカルトのあいだに思想的な影響関係はあったのか。この当初の問いに対して、本稿での「再考」をつうじて辿りついた答えは、最後の手がかりともいべきデカルトの初期テキストのなかにあっても、ラムスの影をはっきりと捉えることは、やはり困難であったということである。ただそれでも、デカルトがルネサンス人文主義思想を背景にもつラムス的な何かにつうじていたこと、そのこと自体はおぼろげながら見えるにいたったこともまた確かである。その理由としては、第一に、デカルトがルルスの術のうちに「弁証術のトポスの配列」を見てとっていたこと、第二に、ラムスの思想に明確な共感を示すバークマンという友人をもっていたこと、第三に、ラムス主義の思想に限りなく近い立場におくシェンケルの記憶術を直に読んで、紙の上に整理すべき秩序化された知のあり方に目を留めたことが挙げられる。そして、ルルスの術にせよ、シェンケルの記憶術にせよ、いずれのケースもデカルトがみずからの学問の構想にあたり、ありうるかぎりの知へのアクセスを可能とする「鍵」の在り処を求めて積極的にアプローチするような、特別な関心を引く対象であったことも疑いを容れない。デカルトがラムス主義者であったとはいかんせん断言しがたいものの——デカルトの方法も哲学も、ラムスの方法や弁証術とは性格を大きく異にするものであることには変わりがない——、ルルスの術やシェンケルの記憶術と同様に、ラムスの思想もまた、あくまで否定的な契機としてではあれ、新しい知の体系の樹立を目指す若きデカルトの目の前に大きな存在感を放っていた可能性は、その手がかりがいかにわずかであるとはいえ完全に否定することはできないのである。

#### 注

- 1) Charles Waddington, *Ramus (Pierre de la Ramée) : sa vie, ses écrits et ses opinions*, Paris, Ch. Meisyueis, 1855.
- 2) Émile Saisset, *Précurseurs et disciples de Descartes*, Paris, Didier, 1862.
- 3) Walter J. Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue : From the Art of Discourse to the Art of Reason*, with a foreword by Adrian Johns, Chicago, University of Chicago Press, 2004 (1<sup>st</sup> ed.,



- Harvard University Press, 1958). オングはラムスとデカルトの影響関係について直接的に立ち入った議論はしていないものの、とりわけ「方法」概念の検討に際して、ラムスの *methodus* の問題の延長上にデカルトの *méthode* をおいている。同書230頁を参照のこと。
- 4) Nelly Bruyère, *Méthode et dialectique dans l'œuvre de La Ramée. Renaissance et âge classique*, Paris, Vrin, 1984.
  - 5) André Robinet, *Aux sources de l'esprit cartésien. L'axe La Ramée-Descartes. De la Dialectique de 1555 aux Regulae*, Paris, Vrin, 1996 ; *id.* « L'axe La Ramée-Descartes : position dans la règle IV et de la *Mathesis universalis* », in *Descartes et la Renaissance*, E. Faye (éd.), Paris, Honoré Champion, 1999, pp. 67-76.
  - 6)他にも「理性 (raison)」、「数学ないしはマテシス (*mathesis*)」、「自然の光 (lumière naturelle)」などがあり、思想的な立場としての「反アリストテレス主義」も共通する。
  - 7) Frédéric de Buzon, « Mathématiques et dialectique : Descartes ramiste ? » in *Les études philosophiques*, n° 2005/4, pp. 455-467.
  - 8) 久保田静香「ラムス主義レトリックとデカルト—近世フランスにおける自由学芸改革の一側面—」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究—』第4号、早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所、2014年、60-77頁。
  - 9) 佐藤真人「デカルトはラムス主義者か—初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面—」『フランス哲学・思想研究』第23号、日仏哲学会、2018年、174-185頁。とりわけ182頁。
  - 10)『ボール＝ロワイヤル文法』や『ボール＝ロワイヤル論理学』にはラムスへの直接の言及が散見される。Antoine Arnauld et Claude Lancelot, *Grammaire générale et raisonnée*, Paris, chez Pierre de Petit, 1660, p. 21 et 24 ; Antoine Arnauld et Pierre Nicole, *La Logique, ou l'art de penser*, Dominique Descotes (éd.), Paris, Honoré Champion, 2014 [1664年版にもとづく校訂版], p. 290, 379, 403, 409, 542.
  - 11) 桑木野幸司『記憶術全史—ムネモシュネの饗宴—』「第8章 記憶術の黄昏—シェンケルの「方法的」記憶—」講談社選書メチエ、2018年、279-305頁；同「記憶術と叡智の家—ルネサンスの黄昏における伝統の変容—」、ヒロ・ヒライ他編『知のミクロコスモス—中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社、2014年、42-68頁所収。
  - 12) 所雄章『知られざるデカルト』知泉書館、2008年、41頁。
  - 13) René Descartes, *Discours de la méthode* (以下 *Discours* と略記) II<sup>e</sup> partie (AT, VI, 17). デカルトのテキストの引用は『アダン・タヌリ版 デカルト全集』に拠る：*Œuvres de Descartes*, Ch. Adam et P. Tannery (éds.), Paris, Vrin / CNRS, 13 vols, 1963-1973 [nouvelle présentation ; rééd. en petit format, 1996]. 略号 (AT)、巻数 (ローマ数字)、ページ数 (アラビア数字) の順に記す。原文引用に際しては、綴り字は近代書法に改める。
  - 14) 本章の執筆にあたり、主に次の研究書を参照した。パオロ・ロッシ『普遍の鍵』清瀬卓訳、国書刊行会、1984年；フランセス・A・イエイツ『記憶術』玉泉八州男監訳、水声社、1993年；メアリー・カラザース『記憶術と書物—中世ヨーロッパの情報文化—』別宮貞徳監訳、工作舎、1997年；アン・ブレア『情報爆発—初期近代ヨーロッパの情報管理術—』住本規子他訳、中央公論新社、2018年など。
  - 15) Raimundus Lullus, *Ars brevis, quae est imago Artis generalis*. 1308年1月にピサのサン＝ドンニノ (San-Donnino) 修道院で書かれた。初めて印刷機にかけられたのは、1481年バルセロナにて (AT, X, 63, note c.)
  - 16) Heinrich Cornelius Agrippa von Nettesheim, *In artem brevem Raymundi Lullii Commentaria* (1533), in *Opera*, Tome 2, with an introduction by Richard H. Popkin, Hildesheim, New York, G. Olms, 1970, pp. 319-451.
  - 17) P. ロッシ『普遍の鍵』前掲書、174-182頁。
  - 18) Lambert Thomas Schenkel. *De memoria liber*, Douai, 1593.
  - 19) デカルトが直接知っていたのはこの1600年版であるとされる：Henrici Cornelli Agrippae, (…)*Opera omnia, in duos tomos concinne digesta*…, Lugduni, per Beringos Fratres, 1600 (AT, X, pp. 63-64, note d.)
  - 20) Johannes Paep, *Schenkelius detectus, seu memoria artificialis hactenus occultata*, Lyon, B. Vincentius 1617.
  - 21) Tommaso Campanella, *De sensu rerum et magia*, Francofurti, apud Egenolphum Emmelium, 1620.

- 22) *Les Œuvres de Jean Belot, ... Contenant la chiromance, physionomie, l'art de memoire de Raymond Lulle, ...* Lyon, Claude de la Rivière, 1654.
- 23) デカルトからベークマン宛て、1630年10月17日、アムステルダム : « Unum dicit Plato, aliud Aristoteles, aliud Epicurus, Telesius, Campanella, Brunus, Basso, Vaninus, Novatores omnes, quisque aliud dicunt ; » (AT, I, 158).
- 24) *Discours*, 1<sup>e</sup> patrie (AT, VI, 5) : « j'avais parcouru tous les livres, traitant de celles qu'on estime les plus curieuses et les plus rares, qui avaient pu tomber entre mes mains. »
- 25) デカルトは1607年春 (11歳) から1615年秋 (19歳) まで、ラ・フレーシュ学院で学んだ。Geneviève Rodis-Levis, *Descartes. Biographie*, Paris, Calmann-Lévy, 1995, p. 25.
- 26) デカルトは1616年11月9日および10日 (20歳) に、ボワティエ大学法学部でバカロレアと学士の学位を取得している。
- 27) *Discours*, 1<sup>e</sup> partie (AT, VI, 9-10).
- 28) デカルトからベークマン宛書簡、1619年3月26日、ブレダ (AT, X, 156-157)。本章で引用する1619年のベークマン宛書簡の邦訳は次を参照し、訳文は大幅に改めた : 『デカルト全書簡集 第一巻 (1619-1637)』山田弘明他訳、知泉書館、2012年、6-19頁。また本章の考察にあたっては、次を参照 : 石井忠厚『哲学者の誕生—デカルト初期思想の研究—』東海大学出版会、1992年、442-452頁。
- 29) デカルトからベークマン宛書簡、1619年4月29日、アムステルダム (AT, X, 164-165)。
- 30) 同上。
- 31) ベークマンからデカルト宛書簡、1619年5月6日、ミッデルブルフ (AT, X, 167-169)。
- 32) ベークマンの日記、1619年5月2日から14日の間に書かれたと推定 (AT, X, 63-65)。邦訳は次を参照し、訳文は大幅に改めた : 『デカルト 数学・自然学論集』山田弘明他訳、法政大学出版局、2018年、48-49頁。
- 33) ラムス『弁証術』1555年版の「発想 (invention)」部門に組み込まれている「トポス (les lieux Topiques)」は、数え方によって7~11種類に分けられる (1 principes, 2 éléments, 3 termes, 4 moyens, 5 raisons, 6 preuves, 7 arguments)。最後の « arguments »が« artificiels »と« inartificiels »の2つに分けられ、« arguments artificiels »がさらに4つに分けられる (① causes / effets ② sujets / adjoints ③opposés ④composés)。Pierre de la Ramée, *Dialectique*, André Wechel, 1555, pp. 4-6. 本書を参照する際には、以下、*Dialectique 1555*と略記する。
- 34) Klaas van Bekel, *Isaak Beeckman on Matter and Motion. Mechanical Philosophy in the Making*, Baltimore, The John Hopkins University Press, 2013, pp. 147-163.
- 35) *Ibid.*, p. 159 : « Ramism was much more than just a pedagogical philosophy for Beekman. His mechanical philosophy is, to some extent, an application of Ramist principles. »
- 36) *Ibid.*, p. 161 : « Finally, Beekman's preference for a visual representation of concepts over purely verbal and abstract principles also may be partially attributed to his Ramist education, because, for Ramists, knowing was basically seeing. »
- 37) René Descartes, *Œuvres complètes I. Premiers écrits, Règles pour la direction de l'esprit*, sous la direction de Jean-Marie Beyssade et Denis Kambouchner, p. 55 et p. 548.
- 38) *Dialectique 1555*, p. 1 et p. 4 : « Dialectique est art de bien disputer. Et en même sens est nommée Logique, car ces deux noms sont dérivez de logos, c'est-à-dire raison. » ; « (···) l'art de cognoistre, c'est-à-dire Dialectique ou Logique, est une et mesme doctrine pour apercevoir toutes choses, ... ». 下線強調筆者。
- 39) W. J. オングは、ラムスの弁証術で展開される方法理論が「非哲学的、すなわち修辭学的なフレームに準拠」して構築されていると指摘している。W. J. ONG, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue*, op. cit., p. 247.
- 40) ラムス著フランス語版『弁証術』には、「発想」と「判断」の二つが属すると明記されており、なかでも「配置」は「判断 (jugement)」と同一視されている。*Dialectique 1555*, pp. 4-5 : « Les parties de Dialectique sont deux, Invention et Jugement. (···) Le jugement est aussi nommé disposition. »
- 41) ラムスの弁証術と修辭学の成り立ちと関係については、次の拙稿を参照のこと : 久保田静香「ラムスと「限定されたレトリック」」『明學佛文論叢』第52号、2019年、77-106頁。
- 42) P. ロッシ『普遍の鍵』前掲書、187頁 : 「記憶力を弁証術とか新論理学の構成要素のひとつとして活用すること」。

- 43) *Dialectique 1555*, p. 119.
- 44) F. A. イエイツによれば、16世紀後半にケンブリッジ大学で熱烈なラムス主義者として知られたウィリアム・パーキンズ (William Perkins, 1558-1602) が、その著作『反ディクソヌス (*Antidicsonus*, 1584)』において、ラムスの弁証術を「記憶を助ける技術」として捉えているという。F. A. イエイツ『記憶術』前掲書、318頁。
- 45) Walter J. Ong, *Ramus and Talon Inventory*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1958, pp. 510-533.
- 46) *Ibid.* p. 529: « Schenkel (Schenkelius) Lambert Thomas (S) ». オングによればこの「カッコつきのS」とは、「著作中にラムス主義への親近性がいくらか示されているが、準ラムス主義者よりはその程度が低い者」を意味する (*Ibid.*, p. 512)。
- 47) 桑木野『記憶術全史』前掲書、295頁。
- 48) 桑木野氏によれば、シェンケルの『ラテン語の方法』(1619)には、「簡潔で明瞭で平易な方法」や、「たった一目で、そのすべてを把握することが可能である」といった表現がみられるという (同書、298頁)。これらはまさしくラムスの「方法 (*methodus*)」の理念に通ずるものである。
- 49) 本稿注17参照。シェンケルの『記憶の書』は、1610年刊『記憶術の宝物庫』に再録される: Lambert Thomas Schenkel, *Gazophylacium artis memoriae*, Strasbourg, Antonius Bertramus, 1610. この『記憶術の宝物庫』にはシェンケルの名が冠されているが、実態は16世紀末から17世紀初めにかけての複数の記憶術書をまとめたもの (桑木野『記憶術全書』前掲書、284-285頁)。デカルトが目を通したのは、初版の1593年版ではなく、この1610年再録版であるとされる。Cf. Descartes, *Études du bon sens, La recherche de la vérité et autres écrits de jeunesse (1616-1631)*, Vincent Carraud et Gilles Olivo (éds.), Paris, P. U. F., 2013, p. 150, note 47. 以下、*Études du bon sens 2013*と略記。
- 50) Descartes, *Cogitationes privatae* (AT, X, 230). 下線強調は筆者による。訳出にあたり、次の仏訳も参照した: *Études du bon sens 2013*, pp. 135-136. 邦語訳では次を参照し、訳文は大幅に改めた: 所『知られざるデカルト』前掲書、41頁 (部分訳); 『デカルト 数学・自然学論集』前掲書、94-95頁。
- 51) *Ibid.* 下線強調は筆者による。
- 52) Descartes, *Regulae ad directionem ingenii*, Regula III (AT, X, 370): « Atque hae duae viae sunt ad scientiam certissimae (…). »
- 53) *Ibid.*, Regula VII (AT, X, 387-388). 訳出にあたり次を参照し、必要に応じて訳文を改めた: デカルト『精神指導の規則』野田又夫訳、岩波文庫、1993年 (初版1950年)、43-44頁。